昭和五十六年二月二十二日 資料

第一〇七回 史跡めぐり

日光道中シリーズ
第五回 杉戸宿

越谷市郷土研究会
石塚吉男氏

○杉戸宿附持添新田　杉戸宿は、日光及び奥州の街道にて、足立郡千住宿より第五の驛亭なり、庄名前に同じ、葛西郷に屬す、江戸より十里半、古は杉戸村と號せり、元和二年人馬の繼立を命ぜられ、宿驛となりしより村を改て町と唱へ、既に正保元祿二度の改にも町と載せたれば、宿の唱は其後のことなり、當所は人足二十五、人馬二十五疋を定數とし、北の方幸手宿へ一里二十五町、南の方埼玉郡柏壁宿へ一里二十一町、其餘同郡岩槻町へ三里、久喜町へ二里、下總國關宿町へ二里、同國實珠花村へ二里の間を繼立てり、依て一萬坪の地子を免除せらる【前太平記】及【源平盛衰記】に載たる杉の渡と有は、則當所のことにて、渡と戸の唱へ同しきを以て、後戸に改めしなどいへど、彼條は上野より武藏に入路の渡りにて、今此所より國界までは若干の里程を隔ち、且埼玉郡向古河村に杉の渡蹟と云地あり、地理のつひて、爰にはあらで、恐くは彼の所その古蹟なるべし、四隣東は清地、倉松の二村、南は古利根川を隔て埼玉郡百間村、西は當郡下高野村、北は大島新田なり、東西十三町、南北十七町程、街道は南北に通せり、家數三百三十、多く道の左右に連住せり、毎月五十の日を以て市をなし、村民時用のものを交易す、用水は琵琶溜井を引て耕植せり、古より御料所にて、捨地は元祿十年酒井河内守改む、隣村倉松村に當所の飛地あり、又明和三年伊奈備前守捨せし持添の新田あり、

高札場宿の中程にあり

小名　上杉戸　當所に街道より西に分れて、上高野村に通る一條あり、古道と唱ふ、此條に枝さし掩たる一樹あり、土人道松と呼べり、　新町　下町　中町　上宿　雅樂　河原組　與左衛門　舍人　内藏　九軒茶屋

古利根川　宿の南を流る、川幅二十四間、

香取社　東福寺持　○神明社　神明院持　○愛宕香取合社　實性院持、以上の三社は宿の鎮守なり、○第六天社　同院の持、　○天神社　○稲荷社　二一は實性院下同じ、一は村民持　○荒神社　村民持下同じ　○八幡社　一は村民持

實性院　新義眞言宗、埼玉郡百間村西光院末、杉戸山と號す　本尊聆藏界の大日を安せり、當寺は古郡中幸手宿の城主一色宮内少輔義純建立して不動坊と號せしが、元和二年教誡と云僧今の院號に改しとのみ傳へり、一色氏のことは幸手宿の始、近村居城の條々其傳聞たれば、合せ見るべし、　不動堂　鎮座元祿五年の創なりし

が、祖せしより寛政七年離改めり、寛　○眞藏院　同宗、同門徒、八幡山と號す、慶長十九年の草創なりと云、本尊大　○神明院　同宗、東大輪村密藏寺門徒、春照山と號す、寛永八年能音と云僧建立すと傳へり、本尊聆藏界大日、　○東福寺　同宗、内國府間村正福寺末、香取山と號す　発願と云僧元和九年草創し、其頃は門徒なりしが、文化十一年僧能敬法流相續せしより、寺格改り今の如く末寺となれり、本尊不動、　○善徳寺　眞言宗、曹洞派、小淵村淨光院門徒、慈眼山と號せり、開山金龍寛永六年建立す、本尊正觀音、　○田中寺　天台宗、

埼玉郡騎恩寺村騎恩寺門徒、長瀬山と號す、寛永元年光海といへる行人僧寺を開き、貞享五年寂せり、本尊大日、

稲荷社　拝天社　金毘羅社

○清地村附火森院新田　清地村は、郷庄の唱、検地の年代、用水等前村に同し、江戸より十里、民戸百四十九、東は堤根村、南は古利根川を隔て埼玉郡百間村、西は郡内杉戸宿、北は倉松村なり、東西十九町、南北五町、昔は御料所なりしが、元禄十一年酒井日向守、三宅傳左衛門、高田乙次郎、能勢武左衛門四人に賜り、今子孫酒井彌門、三宅錠之助、高田芳吉、能勢鶴之助知行せり、其餘持添とせる大森院新田と云あり、寛延二年吉田源之助、稲守勘右衛門検地す、

高札場四ヶ所

小名　三本木　後に一里塚あり　上清地　下清地　九右衛門新田　慶後　鹿町

古利根川　南を流る、幅二十間、此川に土橋を架す、清地橋と唱ふ、長十三間、幅九尺なり、百間寄手二領にて作る處なり、

近津明神社　村の鎮守なり、神體詳ならず、來迎院持なり、下三社ともに持同、　○拝天社○金山権現社○雷電社○神明社　倉松村延命院持　○天神社二ヶ所は延命院持、一は來迎院持、○八幡社　萬福寺持下同　○於泥権現社　泥中より出しにより名付と云、神體詳なし　○香取社　村持　○稲荷社二ヶ所は來迎院持、一は村持、

來迎院　新義真言宗、平氣賀村東覚寺末、光照坊花光山と號す、本尊不動は火師の作と云、立像なり、大師は弘法にて、開山寛休慶長十五年八月八日化す、　觀音堂　鐘撞　寛永元年鑄造の鐘なかく、○萬福寺　新義真言宗、埼玉郡百間村西光院末、醫王山と號す、本尊薬師、　○至寶院　高山義修開、寛治村真覚寺末、本尊不動を安す、○薬師堂　至寶院持

すぎと　杉戸〈杉戸町〉

杉門・杉渡とも書く（新編武蔵）。県東部，大落古利根川左岸の沖積地に位置する。地名は杉の渡しの意で川の渡し場からその名が起こったともいう（地名誌）。「源平盛衰記」に見える杉の渡しは当地を指す（新編武蔵）ともいわれるが不詳。江戸期には，日光および奥州への街道筋にあたり，本陣がおかれた。また稲荷神社脇には「八九間空に溶ふる柳かな」の松尾芭蕉の句碑があり，また慕末に近隣の信仰を集めた富士講の富士塚が残っている。当地の真言宗宝性院は，幸手領の領主一色義範の建立で，当時不動坊と称したと伝える。なお，天正～文禄期のものと推定される某（伝日恒）書状には「すきと」の地名が見える（信立寺文書／埼中・武文）。

〔近世〕杉戸宿　江戸期～明治22年の宿名。葛飾郡幸手領のうち。古くは田宮荘鷲宮郷に属したという。寛永年間頃，下総国より武蔵国に編入されたと思われる。幕府領。村高は「田園簿」では杉戸町として1,113石余，うち田696石余・畑417石余，「元禄郷帳」でも杉戸町として1,159石余，「天保郷帳」では杉戸宿となり1,177石余。町の規模は東西17町余・南北20町余。化政期の家数330軒，葛西領用水を使用。当宿は，日光・奥州の街道筋にあたり，千住宿から5番目の宿場。江戸より10里半。元和2年に人馬の継立を命ぜられて宿駅となった。明暦3年には人足25・馬25を定数とし，元禄9年には1万坪の地子が免除された。江戸後期には本陣1・脇本陣2・旅宿46，助郷高1万3,764石（埼玉県の歴史）。集落は街道に沿って街並みを構成，5・10の日に六斎市が開かれて近郷商圏の中心地をなしていた。町中は新町・下町・中町・上宿の行政区に分かれ，それぞれ名主や問屋が置かれていた。鎮守は香取社，寺院は真言宗宝性院・同真蔵院・同神明院・同東福寺・禅宗善徳寺・天台宗用中寺。高札場が宿の中央にあり，小名には雑楽・与左衛門・舎人・内蔵・九軒茶屋などがあった。明治4年埼玉県，同12年北葛飾郡に所属。同9年の戸数380・人口1,732，馬5，物産は米・麦・大豆・酒・醤油・油など，民業は農・商。同22年杉戸町の大字となる。

〔近代〕杉戸町　明治22年～昭和30年の北葛飾郡の自治体名。杉戸宿・清地村・倉松村の1宿2か村が合併して成立。大字は杉戸・清地・倉松，村役場を大字杉戸に設置。町名は近世の宿場名による（合併史）。人口は明治22年3,591・昭和25年5,661，明治32年東武伊勢崎線が開通し，杉戸駅が大落古利根川対岸の南埼玉郡宮代町百間に開設された。利根川の洪水によりしばしば被害を受け，昭和22年のカスリン台風では半壊4戸・床上浸水811戸の被害があった。昭和30年，現在の杉戸町となる。

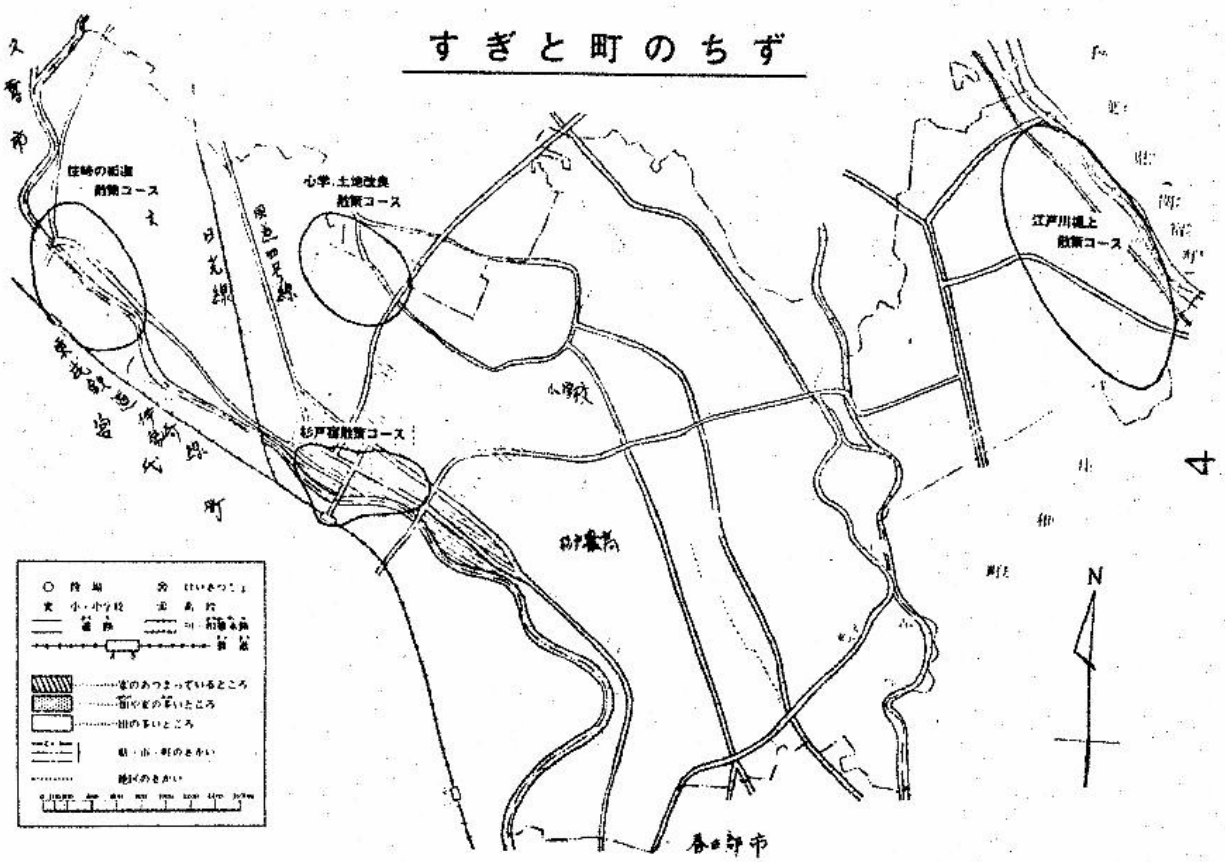
〔近代〕杉戸町　昭和30年～現在の北葛飾郡の自治体名。杉戸町と高野・堤郷・田宮の3か村と合併して成立。16大字を編成。同31年幸手町大字戸島の一部を本島と改称して編入，同32年泉村を編入し，戸数2,361・人口1万3,913となった。同35年大字木崎・芦塚・倉常を庄和村（現庄和町）へ編入。同45年の人口2万244。⇨〈地誌編〉杉戸町

〔近代〕杉戸　明治22年～現在の杉戸町の大字名。昭和39年に一部が杉戸1～4丁目，内田1～2丁目となり，一部は住居表示未実施地区として残る。杉戸町役場の所在地であった。また北葛飾郡と中葛飾郡の郡役所も当地に置かれた。人口は明治22年1,994・昭和45年933。利根川の洪水時にはしばしば水害を受けていたが，とくに昭和22年のカスリン台風による利根川洪水には大きな被害を受けた。⇨〈地誌編〉杉戸町

〔近代〕杉戸1～4丁目　昭和39年～現在の杉戸町の町名。もとは大字杉戸の一部，住居表示により成立。昭和45年の人口は，1丁目699・2丁目723・3丁目1,166・4丁目1,194，計3,782。⇨〈地誌編〉杉戸町

すぎのとうげ　杉ノ峠〈小鹿野町〉

すぎと町のちず



杉戸町の自然的環境と歴史・沿革

杉戸町の自然的環境

杉戸町は埼玉県の東北隅に位置し、町の東端を江戸川（対岸は千葉県）、西端を古利根川が南流している。東縁に一部台地があるが、それと古利根川との間、約6kmの沖積低地は、古利根川と旧渡良瀬川の氾濫原となっていた所であり、杉戸町のほとんどはこれである。

目沼、木津内、宮前、鷲巣、木野川と続く洪積台地は、南北に狭長であり、この台地は江戸の初期、下総台地と地続であったが、江戸時代に行なわれた、一連の利根川治水事業によって下総台地と分断されたものである。

河畔砂丘は、下野から下高野にかけてと、堤根から春日部市小淵にかけて見られる。いずれも古利根川の旧河道の東側ないし南側に接しており、微高地に続いている。古利根川旧河道筋には、杉戸町より上流に加須市志多見、鷲宮町西大輪など、下流に春日部市藤塚など数多くの砂丘がよく残されている。当時、砂の供給が多かったこと、砂の移動がしやすかったこと、砂を堆積させるのに便利な障害物のあったことが原因と考えられる。これら砂丘は、古利根川の運搬、堆積作用、流路の時代的変遷を考えるうえで大きな示唆を与えてくれる。

杉戸町の歴史・沿革

伝説時代、縄文・弥生時代　関東の低地は、平安時代の初期頃（およそ１１００年前）までは、千葉側から、勝鹿（かつしか）の真間（まま）の入江、埼玉側から幸魂（さきたま）の入江と呼ばれた古東京湾の一部で、やや高いところだけが島になっていた。上杉戸や高野一帯もそうした島のひとつであったらしく、高野永福寺の由来を記した『龍燈山伝燈記（りゅうとうさんでんとうき）』によると、今から１８００年ほど前、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征の帰路に“薩天（さつてん）が島”と呼ばれるこの島に上陸したところ、杉の老木がうっそうと生い茂って水門をおおっていたので、「杉門（すぎと）」と命名したといわれている。（伝説時代）

町の北東部（旧豊岡村）の貝塚からは、縄文初期（約７０００年前）と推定され

る土器類が出土しており、杉戸町ではここが最古の人跡地であろうと思われる。ついで、奈良時代の初期頃、まだ古東京湾の島であった西部（旧高野・上杉戸地区）に下総の人々が移住してきて、定住を始めたようである。

奈良・平安時代　『埼玉県史』によると、奈良時代の東海道と東山道を結ぶ道が「高野渡」を経て通じていたと推定される。上杉戸と高野の地は、古く奈良時代から江戸初期にかけてこの地方の中心であったらしい。平安時代初期頃には現在の北葛飾郡には４つの郷があったと記録されているが、そのうち、大島郷は上杉戸、高野地区から幸手方面にかけての一帯、桑原郷は堤郷方面一帯といわれている。

鎌倉時代 ～ 戦国時代　鎌倉時代にも、高野渡が奥州路の重要な渡しであり、軍事上、交易上の要地であったことが記録されている。室町時代には、この地方一帯は、幸手の田宮城に拠る一色氏の支配下にあり、やがて戦国時代には、上杉氏との合戦で高野・上杉戸一帯が焼き払われるなど、戦乱に苦しめられた。

江戸時代　現在の杉戸町の市街地の形成はこの時代に始まる。元和２年（１６１６）に江戸の千住から奥州街道（日光街道）が設定され、杉戸宿として現在の愛宕神社付近が最初の新しい杉戸の街区として形成された。やがて参勤交代が始まり人馬の往来が頻繁になると、上杉戸方面の人々も少しづつ移動を始めた。とくに万治３年（１６６０）には、横町―小谷堀―上高野を経て幸手へ通ずる新道が作られたので、上杉戸から高野へ通ずる旧道はすたれ、舎人、雅楽の住民は横町方面に、上杉戸の住民は新町方面に移住した。またこれより先、慶長９年（１６０４）の御成街道の開通による高野の繁盛も杉戸に移り、杉戸宿がこの地方の中心となった。

明治以後　明治の初期には、現在の杉戸町は、大字単位で構成されるいくつもの郷村に分かれており、明治２２年、町村制の施行で１町５ヵ村になり、その後、昭和３０年２月１１日に、旧杉戸・高野・田宮・堤郷の１町３村が合併し新しい杉戸町に発展した。一方、同年４月１日に旧桜井・豊岡の２村が合併して泉村となった。そして、２年後の昭和３２年７月１７日には、両町村が合併し、昭和３５年１１月３日、旧泉村の一部を庄和町へ分離して現在の杉戸町となった。

交通上からみれば、東武鉄道日光線の分岐点に隣接し、また国道４号線が町の南東部から北西部へ走り交通の要地になっている。産業は農業がおもなものであるが

中でも東部では野菜・苺の促成栽培や花木、酪農が盛んである。近年東京への通勤圏のため急激に都市化が進んでいる。

メ　モ

杉戸宿
散策コース

利根川堤上に発達した
街並見学コース

徒歩　1時間30分
（約4km）
家族向き

散歩コース及び距離

杉戸駅……（0.6km 歩き 9分）……芭蕉句碑
……（0.4km 歩き 5分）……豊宮神社
……（0.2km 歩き 3分）……本陣
……（0.2km 歩き 3分）……明治天皇御小休跡
……（0.2km 歩き 3分）……神明神社
……（0.7km 歩き 9分）……近津神社
……（0.5km 歩き 8分）……来迎院
……（1.3km 歩き 20分）……杉戸駅

南　埼　玉　郡

宮　代　町

◀芭蕉句碑

▼浅間様（写真の右側が芭蕉句碑）

杉戸宿散策コース

徒歩１時間10分（約４km）家族向き

東武鉄道を杉戸駅東口で下車し、駅前の通りを約200ｍ歩くと古利根川に出る。橋を渡り、川に沿った道を左折する。川沿いの道を約400ｍほど進むと右手に小さな神社と丘のある公園がある。この内に**芭蕉句碑**がある。

芭蕉句碑

厳島神社の境内、通称杉戸公園内の丘の上にある。句は自然石に刻まれてあるが、長い間土中にあったものを発掘し、ここに建てたもので、碑面には次の句が刻まれている。「八九間空に雨ふる柳哉」　はせ越（芭蕉）

また、厳島神社では毎年７月１日朝６時に氏子が集り、祭事のあと朝食を共にするという風習が残っている。

神社境内の丘の裏に小路があり、その道を10ｍ程いくと、稲荷神社に出られる。境内には、天神社、荒神社を併合し祭ってある。稲荷神社の正面の道を出ると、県道に出る。この県道を右折すると左手に電話局、続いて農協が見える。農協のブロック屏が終る交差点を左に曲り、一つめの交差点を右に曲り約５０ｍほど行くと、

▲愛宕神社

▼杉戸宿本陣（長瀬家住宅）

愛宕神社に出られる。愛宕神社は、旧無格社であるが、中々立派で、また境内には三峯神社、天神社、青麻神社などを併合し祭ってある。愛宕神社の鳥居のある方の石段を降り、まっすぐ進むと大きな通りにでられる。これが昔の日光街道である。旧日光街道を左に曲り約20mほど行くと、左手に袋小路があり、奥に門構えの家がある。そこの家が、杉戸宿の**本陣**である。

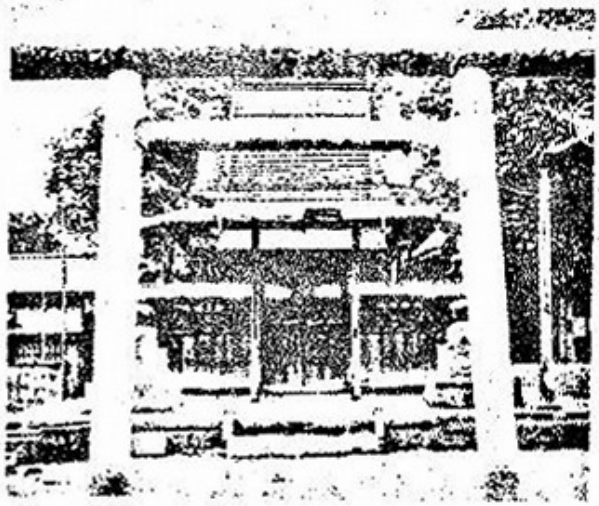
本　陣

江戸時代に参勤交代などのため大名が泊った旅籠で、門を建て玄関を構え、上段の間があるなど、一般の旅籠と性質を異にしていた。杉戸宿は、日光および奥羽街道に面し、元和元年に、奥州（日光）街道の宿駅となる。杉戸宿には、本陣1ヶ所、脇本陣2ヶ所、旅籠46軒、人足25人、馬25頭を有していたとされ、また毎月5・10の日に市が立ったといわれる。現在の本陣は、明治初年、大火で焼け建て替えされた。当主は長瀬光氏で古文書多数を有する。

本陣を出て、来た道をさらに進むと、すぐに信号機のある交差点がある。この交差点の銀行の前に、**明治天皇御休所**の碑が建っている。

◀明治天皇行幸記念碑

▼神明神社



明治天皇御休所

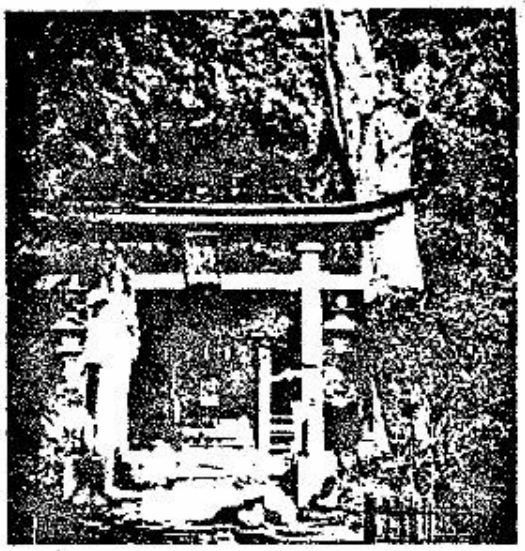
杉戸宿に関する明治天皇の行事の際、御休息された記録は次のとおりである。

明治９年６月３日、奥州巡幸の際、杉戸区務所にて御小休。現渡勝ビル付近。

明治16年７月31日、奥州、北海道巡幸の際、清地の郡役所にて御小休。現杉戸町役場構内。

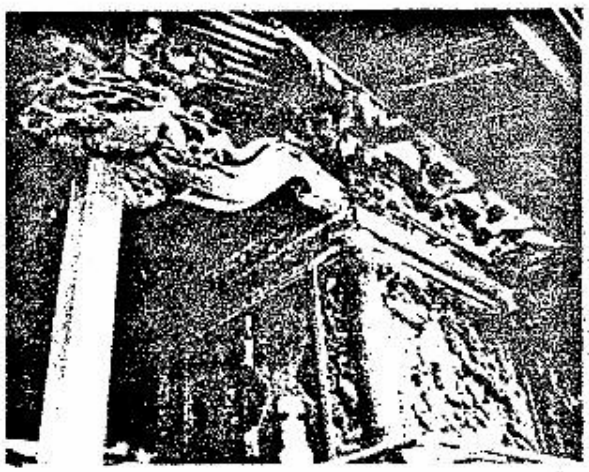
また、最近では、昭和39年11月に皇太子御夫妻が、杉戸町立母子健康センター（杉戸町役場構内）を、御視察されている。

明治天皇御休所をさらに100ｍ程進むと左手奥に鳥居が見える。この神社が神明神社であり、やはり旧無格社であるが、八坂神社、稲荷神社、天神社、白山社（三社様）が併合され、祭られている。神明神社の横の小路をぬけ、右折すると、スーパーマーケットの駐車場の前へ出る。そこを右折し、スーパーの横を通りぬけると県立杉戸高校の横に出る。杉戸高校の屏に沿い左折すると、正面に太い道路が見える。この道路が国道４号線である。国道４号線に出たら、杉戸高校の高いフェンスに沿い右折し、しばらく歩くと、歩道橋がある。歩道橋のところを右折し、用水沿



◀近津神社

▼近津神社本殿の彫刻



いに直進すると、右手に神社の境内がある。この神社が**近津神社**である。

近津神社

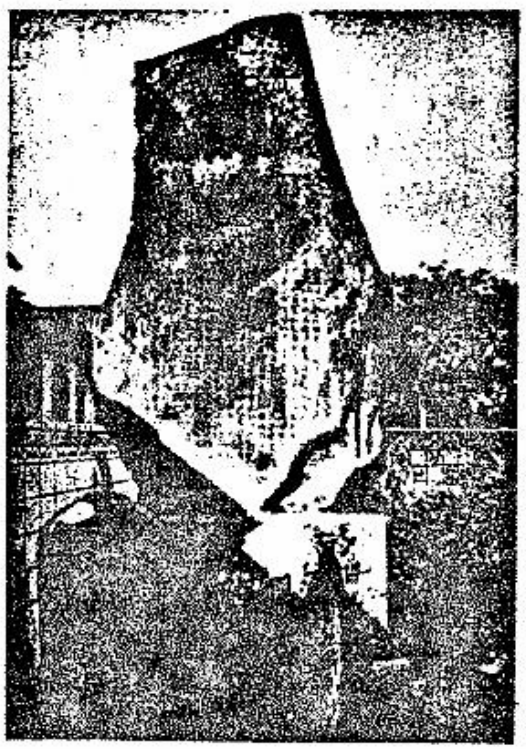
清地村の指定村社として大正8年2月に定められる。貞享元年本社を建設し、安政5年社殿を再建している。本殿の彫刻は作者は不明であるが、その手法をみても非凡で優雅である。また、神仏混淆時代、鎌倉時代に、祖先峯山が、塾を開いたと伝えられる。境内には、稲荷神社、天神社、金山神社、厳島神社、浅間神社、三峰神社が併社され、祭られている。

近津神社を出て、もと来た道を国道のほうにもどり、国道を右折する。そこより、約250mほどゆき、ガソリンスタンドを通り過ぎると、清地の交差点の手前に右にはいる細い道がある。この道を100mほどゆくと広い墓地をもったお寺の前に出るこの寺が**来迎院**である。

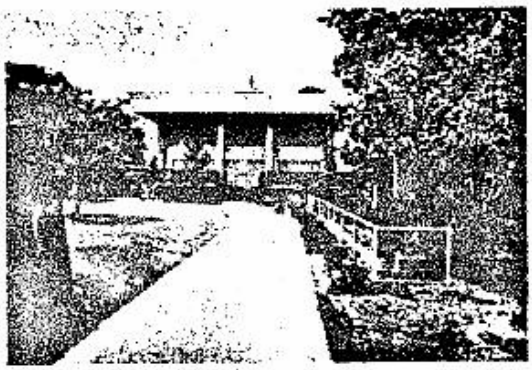
来迎院（真言宗豊山派）

境内には、市川節堂翁の寿碑がある。節堂翁は、上州の人で安戸村の人に請れ留っていたが、明治初期に杉戸学校（現杉戸小学校）の教員となる。徳望厚く、

市川節堂翁の寿碑▶



▼来迎院全景



明治16年10月、翁が71才のとき、近隣の人々がこの寿碑を建てた。また本堂は最近建て替えられたもので、この時仏像なども塗りなおされている。

来迎院を出て、さきほどの道を左折し、さらに進むと、旧日光街道と交差する。旧日光街道を横断し直進すると、古利根川の前の道にでる。この道が宝珠花街道の跡である。古利根川を川沿いに右折し、約800mほど歩くと、さきほど杉戸駅から来た駅前通りと交差をする。この道を左折し約200mほどゆくと、杉戸駅に着く。

このコースは、他のコースと違い交通量の多い所を相当歩くので、車に対しては十分な注意が必要である。とくに、裏通りを歩く時は、気をつけられたい。

(文化財愛護のシンボルマーク)

文化財は後世に残す大切な財産です。

みんなで文化財を大切に守りましょう。

杉戸町地名の由来

杉戸町の地名の研究は、細部についてはほとんど解明されていない。しかしながら、埼玉県の郷土研究の第一人者浦塚一三郎先生の名著「埼玉県地名誌」が、郷土を研究する人々に多くの示唆を与えてくれる。ここに当町に関する全文を抜萃し、住民各位の今後の研究のための資としていただければ幸甚である。

杉　戸（すぎと）

杉戸は古くは鷲宮郷田宮庄幸手領に属し、古利根川畔の町で、江戸時代には日光および奥州街道の宿駅であった。

杉戸の文字は古くは杉門（すぎと）と書いている。高野の永福寺は阿弥陀寺とも称したが、その阿弥陀寺伝に明徳年間の高野の繁昌を記して、「長宿、裏宿、浅間下、松ノ台、杉ノ門の戸口繁昌を極む」とあるが、この杉ノ門が杉戸である。なお「龍燈山伝燈記」にも杉戸を杉門村と記している。ただいにしえの杉戸の本処は、現在と異っており、今の上杉戸から舎人へかけた地方とみられる。

杉戸の意味は杉門の文字によって明らかなごとく杉津、杉渡の意で、利根川の渡し場であったのでその名が生じた。「松屋筆記」にも河門（カワト）は河津なりと記しいる。なお伝説によると日本武尊が東夷征伐のさい真間の入江を渡られ、江中に横たわった薩天ケ島の南岬に船をつないで上陸した。そこは老杉密蒼として水門（ミナト）をおおっていたので杉門と名づけたとのことである（杉戸町大岡晃氏報）。

参考　杉戸（越谷市船渡）

清　地（せいじ）

清地は古くは下河辺郷田宮庄幸手領に属した。清地は正しくはショージと呼ぶべき地ではなかったのかとおもう。清地と書いてショージと呼ぶところもある。ショージはショーズの類語、ショーズはショープと同語で、細流の意である（「日本の地名」）。